



中央区自治協議会提案事業
新潟開港 150 周年記念講演会
「何が湊町新潟の繁栄を支えたのか」
実施報告書



「新潟市西港全景」平成 29（2017）年 11 月 三國和俊撮影

日 時 平成 30 年 2 月 9 日（金）13:30～15:00

会 場 新潟市民プラザ

主 催 新潟市中央区自治協議会（水辺とみなと部会）



中央区自治協議会提案事業
新潟開港150周年記念講演会



「何が湊町新潟の
繁栄を支えたのか」

日時 平成30年2月9日(金)
13:30~15:00 (開場 13:00)

会場 新潟市民プラザ
新潟市中央区西堀通6番町866番地
NEXT21 6階

入場無料
要事前申込

裏面をご確認ください

定員 先着200名

講師 伊東 祐之氏
(新潟市歴史博物館 副館長)



講演内容

- 信濃川と阿賀野川水系の歴史・文化と北前船
- 新潟開港150年の歴史と現在

江戸から明治の湊町新潟とそこに住む人々の関係や、バックグラウンドとなる河川水系地域との関係、商品・情報・人などを通して他地域との交流などについて検討し、新潟市の街と港の現在についてみなさんと一緒に考えてみたいと思います。

主催 ● 新潟市中央区自治協議会 (水辺とみなと部会)

問い合わせ先 ● 中央区自治協議会事務局 (中央区役所地域課内)
〒951-8553 新潟市中央区西堀通6番町866番地 NEXT21 5階
TEL 025-223-7023 FAX 025-223-3660
※車イスをご利用の方はご連絡ください



開催概要

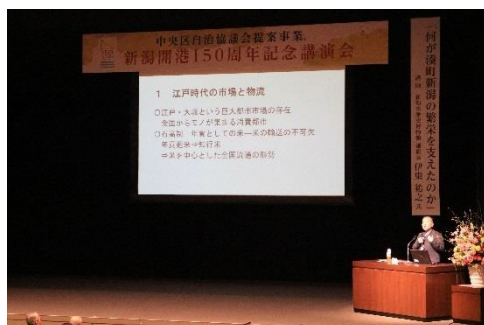
題 名：新潟開港 150 周年記念講演会「何が湊町新潟の繁栄を支えたのか」

講 師：新潟市歴史博物館みなとびあ副館長 伊東 祐之 氏

日 時：平成 30 年 2 月 9 日（金）13:30～15:00

会 場：新潟市民プラザ

参加者：360 名



開会あいさつ

中央区自治協議会会長 田村 幸夫 氏



本日はご多忙のところ、また足元の悪い中、中央区自治協議会主催の「新潟開港 150 周年記念講演会」にご参加いただき誠にありがとうございます。

私は当自治協議会の会長を務めております田村と申します。区自治協議会は、区民と行政が協働しながら地域課題の解決や、地域の特色あるまちづくりを進めるため、各区に設置されている新潟市の附属機関であり、平成 19 年に新潟市が政令指定都市に移行すると同時にスタートし、本年で 11 年目を迎えております。

委員は、コミュニティ協議会や各種団体からの代表、学識経験者、公募委員などからなり、中央区自治協議会は 38 名の委員で構成され、毎月全体会議や専門部会などの活動を活発に行っております。

本日の講演会は、4 つある部会の一つ「水辺とみなと部会」が中心となって企画致しました。この部会では、新潟開港 150 周年の機運醸成につながる事業を数年にわたって実施しておりますが、今年度は本日をきっかけに湊町新潟について多くの皆様に知っていただけますよう新潟市歴史博物館の伊東副館長よりお話をいただくことと致しました。

また、講演会会場の入り口では、古町まち建てのパネル展も行っておりますし、1 階アトリウムにおいては、地域活性化部会が講演会とのコラボ企画として湊町新潟のイベントを実施しております。

本日は、講演会でじっくりと北前船がもたらした多くのモノや事について、知識を増やしていただき、その後は 1 階で体感することで、より湊町新潟を知っていただく機会としていただければ幸いと存じております。

以上、簡単ではございますが開会のあいさつとさせていただきます。

本日は大変ありがとうございました。

「何が湊町新潟の繁栄を支えたのか」

新潟市歴史博物館みなとびあ副館長 伊東 祐之 氏



ご紹介いただいた伊東です。よろしくお願いします。

今日お手元にお配りした資料で、今日のレジュメにあたるものと、皆さんのメモ用紙がついているパンフレットがございます。そこに私の経歴が書いています。長野県生まれと書いていますが、これは親の転勤の都合で長野にちょっといました。生まれたのが長野の病院ただけで、実質、育ったのは桃山町の市営住宅です。当時は一戸建ての市営住宅でした。

その桃山町の市営住宅で、私は覚えていないのですが、3歳のときに行方不明になって、みんなで探したら、臨港の開かずの踏切のところずっと蒸気機関車を見ていたそうです。

港とは関係ないわけではなくて、どちらかというと港と関わりがあったところで育ったということになるかと思います。臨港埠頭に入っただけなのに、そこで釣りをして油臭い魚を釣ったこともあります。

今こうやって偉そうに皆さんに話をしていますが、元々は桃山町の育ちですし、今は東区です。子どものころ、「新潟へ行く」の世界にいたわけです。ですから、新潟というのは、行くところで住んでいるところではなかった人間です。おかげさまで、新潟市で市史編さんを始めるといって、その仕事に就けと言われ、その後博物館の仕事ということで、ずっとやらせていただいております。今日、偉そうにこんなことを話すわけですが、基本的には市民の皆さんのお金で勉強させてもらっているということになります。ですから、還元できることは還元したいと思っていますのでよろしくお願いします。

今日、いただいたお題は「何で新潟の湊は繁栄したのか」。聞き終わって、当たり前のことしかしゃべっていないと思っていただければ幸いです。基本的に、普通に考えていくと、論理的に考えていくとそういうことになるんだという話です。特別なミラクルも起きませんし、すごい話をするわけではありませ

<はじめに>

最初に新潟湊というのが、どうやってできてきたかという話です。町がいつできたかというやっかいな問題は置いておいて、湊ができてくるときに、新潟の場合は信濃川と阿賀野川の河口に3つの湊がありましたというところから始まります。

阿賀野川が今の通船川のところを流れていたのはご存じだと思います。その阿賀野川の河口の右岸に沼垂がある。今の山の下の方の王瀬というところにあつたのではないかとされている。それから、蒲原というのが、その阿賀野川と信濃川に挟まれたところに湊としてあつた。新潟が一番遅く信濃川の左岸にできたと言われている。ですから、この信濃川と阿賀野川の流れ、そしてその出口に湊ができてきた。当然、その川と海の結ぶ場所に湊ができたということになります。沼垂と蒲原、新潟はこういう関係です。

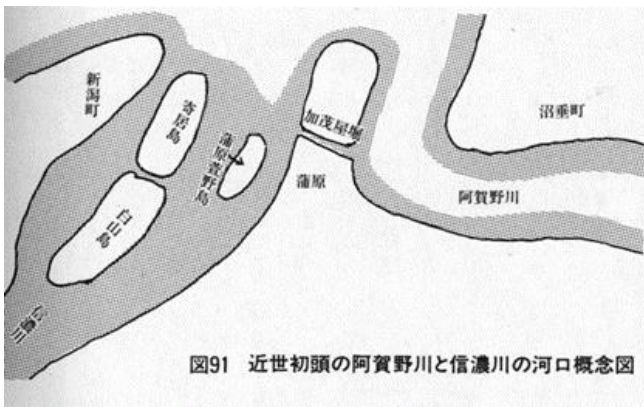


図91 近世初頭の阿賀野川と信濃川の河口概念図

『新潟市史』から転載

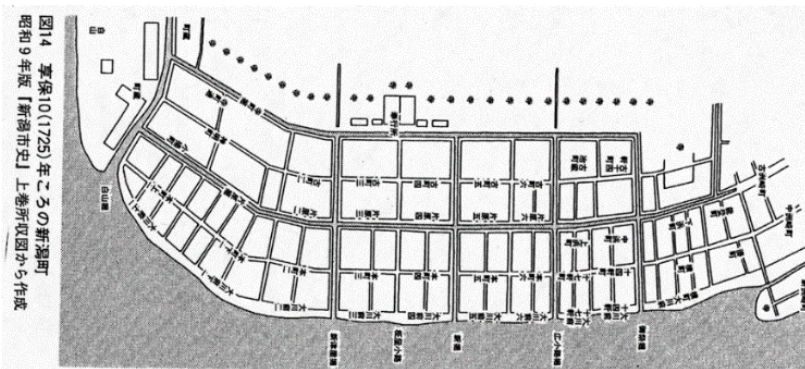
この湊が、この後、阿賀野川と信濃川の下流の流れが変化の中で、それぞれ場所を動かさざるを得なかった。蒲原も沼垂も新潟も町の変換することになります。蒲原の場合はついに居場所がなくなった。例えば、蒲原神社は、延喜式という平安時代のものにも出てくる神社ですが、現在の土地に移ったのは元禄のころ、江戸時代半ばと言われています。そのように動いていく。

沼垂も、再三、阿賀野川の流路が変わり湊が使えなくなる、川欠けで町がなくなるという原因で動

いていく。最終的に元の場所に戻ろうと思ったら、新潟に難癖つけられて今の場所になったという話になります。

新潟の湊も、町は大畑にあって、今の東中通の辺りを流れていた信濃川を湊に使っていた。それが浅くなって、信濃川を挟んであった寄居島、白山島に移る。それが現在の私たちがいる場所ということになります。

このように動いて、さらに沼垂と新潟とで争って、最終的に信濃川の河口は新潟の湊だよということになって、非常に沼垂は苦しい思いをすることになります。新潟はその移転のおかげで現在の古町地区が形成された。形成された古町地区ですが、私は古町地区という言葉になじみがなくて、古町は古町通だろう、本町通や上大川前通は古町通とは違うと思うんですけど。昔の新潟町は、湊町として、移ったときにまちづくりが行われ、湊町として合理的につくられた。町で商売をする人たちに均等に商売の機会を与えるという考え方で、同じ間口で家々を、敷地をつくって、さらに表には通りがあって、裏には荷物を運ぶための堀があるところからまちづくりが始まっている。



『新潟歴史双書 新潟湊の繁栄』から転載

そういう新潟の町が、どんなふう

にここで繁栄していたのか。多い少ないはありますが、新潟の町は年間に船が2,000艘から3,000艘入ったと書いてあります。年間といっても冬の三ヶ月は商売にならないと歌にもあるように、冬は船が入れません。そう考えると2,000~3,000という数字が非常に大きな数字ということが分かります。

レジュメには幕末にやってきた幕府の調査団が書いた報告から資料を引っ張っています。越後は米が多く採れて、新潟は海岸の真ん中にある。海と陸の運送に都合がよくて、家が多くて繁華だと。他国の船

レジュメには幕末にやってきた幕府の調査団が書いた報告から資料を引っ張っています。越後は米が多く採れて、新潟は海岸の真ん中にある。海と陸の運送に都合がよくて、家が多くて繁華だと。他国の船

「山海之便利を占め、米穀多く富有之国柄、新潟は国中海岸之中央にて魚野川、筑摩川等川筋数十里之り利便、其外海陸運送之都合宜、家数人別多く、頗繁華之地にて、稼穡之本業を営み候者よりは海陸運輸之取引、又は他国之船々入港を以生活と致し候者有之」「金銀融通致し候は壱ヶ年何百両ニ可有之哉難計、都て家居立派にて壱万軒余有之…諸国より入津之船乗共滞船中は旅籠屋ニ逗留致し、遊女・女芸者等買揚、其外諸国より荷物出買之商人とも是又同様ニ付、所之利潤ニ相成候間、越後一國は勿論北国筋ニも右様繁華之地は有之間敷と申程ニ候」

が入ってくるので生活している。金銀の融通がよくて家も立派で、北陸から東北の日本海側にかけてこんな繁華な土地はほかにないと報告書を上げています。

そういう新潟の繁栄がどうつくられてきたか。という話の前に、江戸時代の物流の話と、新潟の湊町にどういう役割を果たしていたか、結論を先に申し上げて、その後で何が支えたかという話を順にしていこうと思います

< 1. 江戸時代の市場と物流 >

江戸時代の経済ですが、市場やモノというのはどういうことになっていたのか。日本の江戸時代の特徴は何かというと、江戸、大坂という巨大都市があったわけです。江戸、大坂という巨大都市は、もちろん職人さんもいますけれども、基本的に大消費地です。特にモノをつくらない武士がたくさんいるわけです。そういう大都市が存在して、そこで消費されるモノものというのが全国から集まる構造になっている。

もう一つ、江戸時代のモノは、皆さんお聞きになったことがあると思いますが、加賀百万石。石というのは米の量です。つまり、加賀の国は米が百万石取れる国です。その国を統治しているのが加賀藩ということです。つまり、経済の基本を大名の序列から、村高といって、この村は何石の村だということまで、全部、米の量を基準にしている制度です。それを石高制といいます。どうしても年貢も米で取ることが基本です。例えば、武士は消費すると言っていましたけれども、自分の給料も米でもらうわけです。米でもらった給料は米だけ食べて暮らしていけませんから、当然その米をお金に換えることが必要になるわけです

つまり、米というものが動いて、さらにそれが経済を生み出す構造になっているということです。ですから、米の流通というものが基本として行われていたということになります。

もう一つの特徴は、日本だけではないと思いますが、各地で生産の在り方が別々になります。その土地に適した商品がつくられる。特に江戸の中期以降、さまざまなことが行われる。

例えば、暖かいところであれば砂糖が取れるけど北では取れない。最初、江戸時代のはじめは新潟近辺でも塩なんかをつくっていたわけですが、塩づくりに適した場所が瀬戸内にあるということになって瀬戸内が塩をつくる場所になる。あるいは鮭は北海道、蝦夷地で取れるということになって特産になるわけです。そうすると、その特産品を使った経済がそこで発達していく。さらに、その特産品を各地へ流通させて消費される。ということで、特産品生産、商品としての特産品をつくるということが江戸時代の中期以降どんどん広がっていく。そうしたら、その特産品は流通されなければいけない。

それについて、各藩が自分のところで抱え込んで金儲けの道具にしようとするわけです。藩専売といますが、そうすると一揆が起こって大変なことになるということが各地である。

もう一つ、石高制と並んで江戸幕府の体制の中で大事なものに鎖国制があります。鎖国制というのは、誰でも自由に外国と交流することを許さない。実際には、長崎や対馬、琉球や蝦夷地、限られたところだけで外国と交流する。物品もそこから入ってくるということで、その物品の行き来を幕府が統制する体制です。

ですから、幕府に独占された外国との貿易とのかかわりの中で流通も行われることになります。その最たるものが、北陸とか、東北なんかで関係するところというと、俵物といわれたもので、海産物です。干しナマコや昆布とか、そういったものになります。そういうものを中国に出すためにはみんな長崎へ送られて、長崎から外国に出て行く。それを勝手に出したりすると抜け荷ということになるわけです。流通にそういう限られた方向があった。

藩専売とか、貿易制限とか、そういうことがあるにしても、モノの在り方、生産の在り方からして、非

常に盛んな物流、商品流通というのが江戸時代からあったということになります。

< 2. 新潟湊の物流上の役割 >

その中で新潟の湊はどういう役割を果たしていたのか。江戸時代、どのように大量のものを安く輸送したらいいか。馬の背で運ぶ、大八車で運ぶよりも、船に乗せて運ぶのが一番安くてたくさんのモノを運ぶ手段だった。だから船がメインの流通手段だったということです。

そして、その船が行き来するのが湊になります。物流センターが湊だったということです。船との関係でいうと、最もシンプルな話は船が停まる場所が港だということです。安全にそこに入れる。台風が来たらそこに入れば安全というのが湊としての在り方です。

その船というのは、何のために動いているか。荷物を運んでいます、人を乗せています。としたら、その人たちがその湊で乗り降りがちゃんとできるということ。そのためには、埠頭や棧橋、舳があることが必要になってくる。

降りた人たちやモノはどうするのといったら、その先に運ぶルートがあるかないかが問題です。川があったり、他の船がそれを積み替えて運ぶことができるとか。あるいは近年になってくれば、鉄道があつて鉄道で運ぶとか、今でいえば高速道路がすぐ側を通っているとか、そういうものが湊としての1つの役割です。

もう一つ、船が何をしにそこに来ているか。運んでいるだけであれば、そこで積み卸しをすればいいのですが、後でお話する廻船、北前船になると、商売をしに来ています。ですから、その商売ができるようにしてあげるのが湊の目的として必要になります。それを支えている、湊という港湾施設だけではなくて、その周囲のまちも含めた湊町の機能としてやれるかどうかになるわけです。

具体的には、商品その町で売買できるとか、あるいはモノを買うために必要な資金を手に入れることができるとか。江戸時代だと燃料はないので、船が動くために必要なモノや食料や水が供給できるかという話になります。新潟は、この湊町としての機能を持っていた。単に湊であつただけではなくて湊町としての機能を持っていたということになります。

新潟の特徴的な商品は、何と言っても米が一番です。船が何をしに来ているかという、新潟に米を買いにきているのが一番です。あるいは新潟の米を運ぶことを目的に来ている。そういう意味で、この米というのは、単に新潟から出て行って終わりではなくて、その先に米を買う人がいたり、あるいは運ばれた先で売り払われたりする米になる。その意味で新潟というのは全国市場です。江戸、大坂をメインとする全国がつながる経済市場と結ばれている日本海側の拠点だつたと言えます。

全国との関係でいえばそうなるし、米が新潟に集まってくることで考えれば、新潟は越後や佐渡の1つの経済圏の中心にいる。新潟とほかのところを結ぶ交通手段、物流手段も兼ね備えてあつたということです。海では、小廻しという、後でお話ししますが、船がその役割を果たしていましたが、内水面の川では艀（ひらた）、長船と呼ばれる船がその仕事をしていました。

湊町新潟が、地域においてどういう役割していたかというお話をしました。では、政治的にどうだつたかということ、新潟の町というのは長岡藩領の湊町です。城下町が長岡にあつて、長岡藩の湊町だつたということです。幕末になって幕府領になります。通常藩は、藩という経済体制をちゃんと維持しようとするため、どこの藩でも城下町にいる城下町商人というのを藩が押さえて、その城下町商人に藩内の経済を統制させるのが一般的なかたちです。

例えば、高田藩は、高田の城下町の商人が直江津の商人たちに非常に強い力を持って、港湾のことから、流通のことから、いろいろ制限を加えたりするようなことをやっていました。これが封建時代の藩の在り方です。自由な商売とは違う商売の仕方です。

ところが、新潟の湊は、各地から、阿賀野川・信濃川水系を通じてモノが入ってきて、実際に取引されるものは長岡藩のモノだけではありません。新発田藩の米も村松藩の米もみんな新潟から出て行くわけです。そうすると、長岡藩が自分の都合だけで湊を自由にできる状態ではなかったのです。そういう意味で、新潟の湊というのは、長岡藩から比較的自由的な活動ができた。長岡藩も湊を統制することよりも、江戸時代の中期以降は、新潟の港から上がる税金が大事になって、仲（すあい）という関税を取ることになります。ですから、長岡藩は幕領になって新潟を失うとすごく大変でした。幕末を通じて長岡藩は幕府に新潟を返してくれと言いますが返してもらえませんでした。

＜ 3. 新潟湊を支える — 湊で取引されるモノの生産と需要 ＞

これからが本題になります。では、その新潟の港の繁栄、全国流通、越後・佐渡との中核的な役割を支えた湊の機能や繁栄を何が支えていたのか、いくつかの側面から見ていきます。

湊ということになると、湊町新潟ではモノの売買が行われなくてははいけない。売買が行われるためには、売買されるモノがなくてははいけない。そのモノはどういうふうにやってくるのかという話になります。湊町で取引される商品は、町や村で生み出され、町や村で消費されるものだと。ですから、どこかでモノをつくってくれたり、どこかでモノを使ってくれなければ湊町の役割はないということです。

先ほどお話しした一番の商品である米。江戸時代、新潟で取引されていた米というのは、川を通じて各地からやってくるのですが、それにもいくつか種類がありました。ブランドです。

一番高いブランドは「御米」と呼ばれる米です。江戸時代は基本的に身分制社会です。2人の人間がいれば、必ずどちらかが上でどちらかが下という社会です。それが全てを貫きますので、米にも「御」が付くか付かないか。御が付けば、お殿様、領主、藩と関係するものということです。御米というのは年貢米ということです。各藩で毎年集められた年貢米がその土地で売り払われることを地払いといいます。地払いでない米が何かというと、そのまま藩の領主の米として、御蔵米といいます、大坂なりへ運ばれて、大坂の堂島町上で売買される商品になる。その、大坂などへ運ばれる前に新潟なりで販売されたのが御米になります。

その御米というのがなぜ一番いい米か。悪い米は年貢米として納めてはいけないわけです。一番いい米を農民に税金として納めさせますから、そういう意味で一番いい米だということです。

次に三田米と呼ばれたもの。これは新潟独特の用語ですが、こういう米があります。これは何かというと、地主の作徳米です。地主が手に入れた米。地主は誰から手に入れたかということと小作農民から小作料として納めさせた米ということになります。理屈は先ほどの領主米と同じです。いい米でなければ地主は受け取りません。



(図録『大新潟湊展』から転載)

残ったのが農民の米になります。農民は自分で食べるだけではなくて、農民もお金が必要ですから、自分の米を販売するわけです。その販売した米が町の在宿で買われると、「町米」とか「納屋米」という名前で売り出されます。それぞれランクがあって、それは全て農民がつくっていることになります。

この書類は、関川というのが書いてありますけど、これは江差の商人の船です。その江差の商人が蒲原御米、長岡藩の巻曾根組の年貢米です。それを購入したときの仕切りという書類になります。こういったもので蒲原御米とブランドが書かれて売買されているということになります。

そのほか、こういうふうに関地につくられて新潟へ運ばれていく。例えば沼垂の焼酎が新潟から出て行くとか、あるいは五十嵐でつくられた干鰯が新潟に集められて大坂に行って、五十嵐干鰯というブランドで売られる。あるいは、与板の醤油が北海道、蝦夷地へ売られている。あるいは味噌なんかも、そのように出て行く。さまざまなモノが、新潟の周りの越後の村や町でつくられて、それが新潟に集まって全国市場へ出て行くということが行われているわけです。

片方で、新潟でもモノをつくっています。つまり、新潟に原料がやってきて、その原料を新潟で加工して付加価値を付けて製品にしてよそへ出すということが行われています。新潟町の職人さんたちの仕事になります。実は、新潟の町は職人がたくさんいました。七島表という藺草（イグサ）でつくったござ。これが九州や、そのほか、瀬戸内海からやってきて、当然、これも船で新潟へ運ばれてきて、新潟で新潟の商人が買うわけです。それに越後の村々から運ばれてきたワラを使って畳屋が畳をつくるわけです。それが蝦夷地へ運ばれる。蝦夷地では畳をつくりたくてもつけれない。なぜかというワラがない。ワラがないというのは、米をつくっていないから。米をつくっていない蝦夷地なんかへこの畳が輸出されるということになります。

あるいは、会津や東蒲原から運ばれてきた材木。それと、やはり東蒲原からきた漆を、新潟の職人が塗りをして漆器ができる。これが新潟漆器として売りに出される。あるいは、加茂の桐とか。やはり材木がやってくる。それを新潟の職人が下駄にする。大正、昭和の初めごろまで、新潟の町に300人近い下駄をつくる職人さんがいた。今はこの大新潟市になって、下駄をつくっているのは巻の小林さん（小林履物店）のところだけという話です。一時期は、新潟の町の中に桐材を干す、マツボックリみたいな、ピラミッドみたいなものがいっぱい立っていました。あるいは島根辺りから運ばれてきた鉄。それはもちろん三条にも行くわけですが、新潟にも鋳物師、鍛冶と呼ばれる人がいて、鍋や釜をつくって、この鍋釜が全国で出て行くことがあった。

それから、新潟へよそから入ってきて、それが越後各地に運ばれて消費されるというものがあります。当たり前です。一番は何といっても塩です。塩がないと死にますからね。さっき言ったように、江戸の中期以降であれば、瀬戸内海でつくられた米が、あそこもちろんと産地ごとにブランドになっています。三田尻の塩とか、何とか浜の塩とか、全部ブランドになっていて、その浜ごとに値段がみんな違います。そういうものが入ってきて、それが当然のことながら新潟から会津や越後各地へ運ばれて、そこで消費されるわけです。会津藩は一時期、藩が直営もしますし、藩が直営していない時期であっても藩が管理して新潟湊で塩を買い入れています。そして、領内の商人にみんな配っています。

それから砂糖です。和三盆がつくられるようになったこともありますし、黒糖なんかもあります。これが新潟から越後各地の在郷や城下町へ運ばれて、そこでお菓子屋さんがお菓子をつくる。ニシンなんかも、蝦夷地でたくさんとられるわけです。ニシンというのは、日本海側の物流のかなり重要なものを占めます。ニシンが何に使われたかという、江差に行かれた方は中村家住宅というところご存じでしょうか。住宅の下へおいていくと、ニシンの処理をした跡が展示してあります。基本的にニシンは解体されてニシン油を採る。それから、頭や背骨やえらは、全部ブランドで出て行って肥料になる。関西や北陸なんかへ運ばれる。北陸だと田んぼに入れられますし、関西は綿づくりに使われる。そういう肥料になります。それ以外に食べる身があります。その食べる身は干されるわけです。干して長持ちするようにする。それが身欠きニシン。新潟ではたぶん、低湿地だったせいだと思いますが、肥料としてのニシンというのはほとんど輸入されません。ニシンが来ると新潟では身欠きニシンが入ってきます。身欠きニシンが新潟だけではなくて、どちらかという、新潟では海の魚が手に入りますから、新鮮な魚を食べている方が多い。新鮮な魚を食べられない山に身欠きニシンが運ばれるわけです。

魚沼や長岡近辺だと、ゼンマイとニシンの煮付けとか、会津に行くとニシンの麴漬けとか、漬物になっ

たりしています。そういうもの、つまり新潟経由で入った身欠きニシンが運ばれて、その土地の食文化をつくっているわけです。さまざまなものが人々の生活を支えるために新潟を通っていくということがあります。



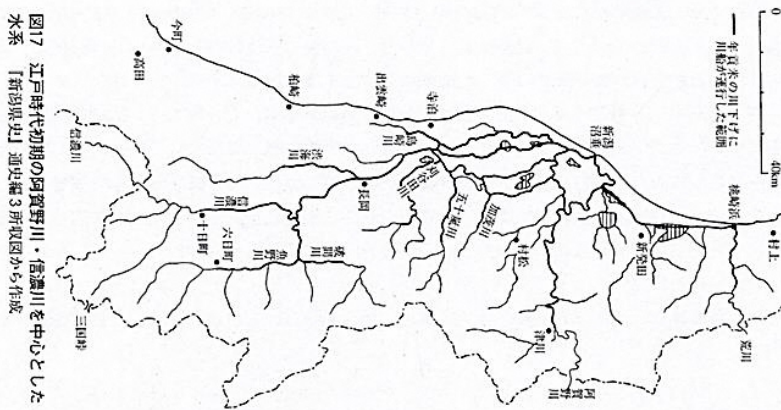
(図録『大新潟湊展』から転載)

これは塩引きです。塩引きが、これも小さな字で白毛と書いてあって、その後に並塩引とあります。白毛というのは産地の名前で、並というのはランクです。そういう塩引きもちゃんと運ばれてきたとき、どこ産の上中下というのが付いて、値段がついているということが分かります。そういう塩引きが新潟であがっているものになります。

今は商品となったものを運ぶ話をしました。その商品を運ぶ人たちと運ぶ船が要るわけです。それがなければ港は成り立ちません。新潟

の港というのは、海と信濃川、阿賀野川、河川の結節点だということが最大のウリなわけです。

< 4. 新潟湊を支える — 湊で扱うモノを船で運ぶ人々 >



(『新潟歴史双書 新潟湊の繁栄』から転載)

地図がありますが、これは新潟湊へ下ろされる年貢米がどこから川船に積まれているか示すものです。黒丸がついているものが出発点になるのです。例えば、信濃川水系でいうと、十日町から新潟まで船で運ばれています。魚野川だと六日町から新潟まで運ばれている。阿賀野川だと津川から運ばれている、あるいは島崎川とか、いろんな川から運ばれてきていることが示された地図です。つまり、この水系というのは、単に年貢

米だけではなくて、先ほど見た米の商品など、そういうものを運ぶ場所でもあります。あるいは新潟の港に入ってきたモノ、例えばさっきの塩も、この川を通じて、遡って運ばれていっているということになります。それをしているのが船です。

海でいうと、新潟湊にモノを運んでくる船を廻船と新潟では呼んでいました。これが今、世間で言われている北前船になります。北前船と呼ばれる船が活動したのは、大坂瀬戸内から蝦夷地の日本海になります。瀬戸内海から日本海側で活動した。この船は、大坂を出発して必ず蝦夷地まで大航海をしている船というわけではありません。この範囲の中で行動しているということであって、どちらかという、非常に長い航海をするよりは、短い航海を何回もするという行動をとる船が普通です。

船の種類という、ベザイ船という名前の船。この船が、非常に優れた船として登場した。これができたことが日本の海運に大きな影響を及ぼすことになります。近世中期以降、長距離を走っている船はほとんどベザイです。何がすごいかというと、帆走船なので帆で動く力がすごく強い。今のヨットと同じようにある程度の向かい風でも、間切って走れる船で、しかも積載能力が非常に高い。これが瀬戸内辺りで始まってあっという間に日本中を席卷したわけです。

北前船、廻船の一番の特徴は買積みということになります。買積みというのは、運賃をもらって、モノをA地点からB地点に運ぶ仕事をしているのではなくて、あるところでモノを買って、それをほかのところへ持って行って売ってもらうという商売をすることです。

教科書で習った江戸と大坂の間を往復していた菱垣廻船とか樽廻船もベザイ船ですが、この廻船は運賃をもらう船なのです。ところが日本海側は、運賃をもらうよりも商売をする船がたくさんいるということになります。



(新潟市所蔵)

この船についていうと、その船を持っている船主がいます。それからその船を実際に運用する船頭がいます。船頭は船を動かす責任者でもあります。同時に商売をする責任者でもあります。この船頭が自分の才覚で品物を仕入れて、自分の才覚で売ります。どこで買ってどこで売るのが大事なわけです。それが儲けられるか儲けられないかの問題になります。

その船を動かす水主(かこ)と呼ばれる船員さんですが、そういう人たちがこの船にかかわっていることになります。この船が新潟に入ってきてモノを

売る。新潟で品物を仕入れる。これが新潟の湊町としての商業になるわけです。

ですから、新潟の経済活動の基本というか、もっとも出入り口になるのは、このベザイが来るかどうか、廻船が入ってくるかどうかということになります。これがベザイです。帆柱に帆印が付いていて、誰の船かを示すものになっています。この印を見て、あれはどこの誰の船だということを新潟の町の人判断します。

このベザイ、新潟に一番多く入ったのは北陸の船です。新潟や越後にも船はあるのですがけれども小さい船のため、近距離で、小廻という船になります。それに対して、一番商売に適しているだろう 200 石から

500 石ぐらいの船の中心は、北陸地方の船主が持っている船になります。新潟の人はあまり持ちません。

北陸の船というのは、今回、船主集落と新潟の寄港地を合わせて日本遺産に認定されました。船主集落がどこにあるかということ、ほとんど後ろに山を背負って海に落ちこちそうなところにあります。そこで産業を興すというよりは、海に出て行って頑張ろうという人たちが暮らしている場所になります。船主は別に自分のところに船を停めていなくてもいいのです。船がどこに停まっていようと関係ない。そういうので、北陸地方の人の船が新潟湊に入っている。西日本からやってくる船は比較的大きいのです。たくさんのモノを一度に積んでくるような船が入っているのが分かります。

先ほど小廻という小さい船がいるという話をしました。この小廻しは、新潟湊の規定でいうと、西

の方は今町、直江津です、東の方の規定は鶴岡の加茂港になります。あるいは酒田、この辺りまでを行き

船籍	石積					計
	100石未満	100石以上	200石以上	400石以上	800石以上	
新潟	26	82	67	26	2	203
越後	301	718	82	38	17	1,156
佐渡	58	261	8	2	0	329
東北	0	193	56	15	1	265
北陸	0	334	191	107	12	644
山陰	0	13	82	36	7	138
瀬戸内	0	9	34	61	15	119
九州	0	0	0	0	2	2
計	385	1,610	520	285	56	2,856

表6 明治2～4年の新潟港入港船の船籍・積石数別船数 越後は新潟を含まない 「開港以来明治二巳年より同三午年同四未年彼我出入船其外取調帳」(『新潟開港百年史』所収)から作成

(『新潟歴史双書 新潟湊の繁栄』から転載)

来する。この近辺を行き来する船が小廻と呼ばれた船です。これもベザイ船の小さな船になります。賃積みメインになります。つまり、問屋から「これをどこまで運んでね」と頼まれて運ぶ船で、船頭が賃積みもします。ですから、新潟の商人と、ほかの港の、近在の港の商人とを結ぶ役割を果たす船ということになります。

内水面でいうと、艀、長船という話をしました。つまり、新潟から河川を通して越後の在郷町をつなぐ船になります。船道という組織に属した船が多くて、これも賃積みになります。

これは新潟の商人と内陸の河岸（かし）と呼ばれる川岸の町の商人をつなぐ役割を果たしています。これが長船で帆柱をたたんで新潟の川や堀に入っています。帆柱を立てると帆が立ちます。

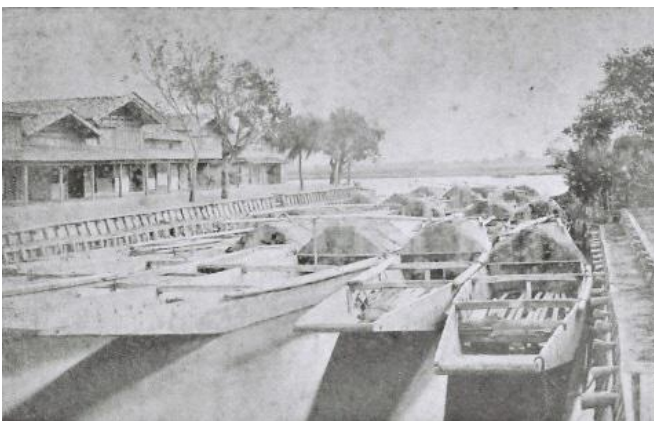
この船道というのが、もともと藩が組織した船乗りたちになります。長岡船道、蒲原船道、沼垂船道、津川船道が有名です。藩が自分の藩の年貢米を新潟に川下げる。その仕事をさせるために組織したのが船道です。

長岡船道というのは長岡の船です。長岡から新潟の間の年貢米輸送をする。その代わりに、魚野川や信濃川上流からやってきた船は、長岡までで必ず終わりにして、長岡の河岸で荷物は必ず長岡船道の船に積み替える。それを新潟に運ぶ。そういう特権が与えられてやっている。その代わりに年貢米を輸送するというをやっている。蒲原船道は新潟の船です。巻首根組の年貢米を新潟へ運ぶということで、西川の舟運を独占する役割をしています。

そのほか、沼垂船道というのは、新発田藩の沼垂へ、各村々の年貢米を運ぶ仕事をしています。津川船道は、津川や、それよりちょっと下流の下条と呼ばれるところの船になります。この船は会津藩の年貢米を新潟へ運びます。それだけではなくて、帰りにはさっきお話ししたように会津藩の管理下で塩を会津へ運ぶ仕事をしていた。

それともう一つ、特徴的な仕事をしているのがこの下条船で、東蒲原でその船頭、船主が薪や炭を仕入れて蒲原平野に売る仕事をしていた。その意味では賃積みの仕事をしていたという特徴的な船になります。蒲原の平野は山がないわけです。山があれば、自分たちの入会の山から薪を採ってこられるわけです。ところがこの平野部は薪がない。燃料がないわけですから、どうしても薪や炭を買わなくては行けない。新潟の町だけではなくて村でも買わなくては行けない。そうなっているので、この仕事は町や村の生活を支える大事な仕事だったということです。

そのほか、三条や与板に組織された船の集団があつて、それもそういう仕事をしていた。そのほか、川縁の村々では長船稼ぎというのをしている人たちがいて、自分で船を持って運ぶ仕事をしていた。在郷町と新潟とか、在郷町と村々を結ぶ仕事をしている人たちです。



(新潟市歴史博物館所蔵)

あと、これは違いますが、今までのものは商売で船を動かしている人たちです。それに対して「イタアワセ」と呼ばれる船は、蒲原の農村の人々というのは、みんなイタアワセを持っています。村によっては、戸数よりもたくさんのイタアワセがあります。このイタアワセは何かというと、今で考えると自家用の軽トラックと考えると分かりやすいと思います。農作業に行くにもこのイタアワセ。新潟の町に買い物に行くにもこのイタアワセ。近隣の村々と町を結ぶのに、全てこのイタアワセで移動するということになります。



(新潟市所蔵)

ですから、新潟の町に野菜を売りに行くなんていうのも、このイタアワセになるわけです。

これは大根船です。昭和になってからの写真で、一番堀から西堀に入るところで、上が道路になっているので、あんな狭いところを通り抜けている。たぶん、横になって動くのだと思いますが大根を載せて堀を行き来している様子が分かります。

湊の中で働く船もあります。舁をしたりする船です。天渡船です。

新潟の町にいる天渡船持ちという人たちがその仕事をしていて、船から蔵まであるいは商店まで荷物を運ぶ仕事をこの船でやっているということになります。こういう船がさまざま、水運にかかわる人々が、いろんなかたちでたくさんいることによって、湊の機能ができていくことになります。

< 5. 新潟湊を支える — 湊町でモノを商う人々 >

次は、商品がやって来たら、その商品を扱う商人がいないと駄目です。湊町として必要な商業活動をしている商人たちがいる。廻船を迎えて商売が成り立っている。廻船の相手をする商人というのが、町のトップの商業を担っている人たちで、廻船問屋と呼ばれる人たちです。これは廻船を持つ人たち、船主ではなくて、廻船の相手をする問屋になります。廻船が入ってくると、その廻船の船頭を泊めてあげて、船頭が新潟で塩を売りたいということになれば、その塩を売る仲介をする。新潟で米を買いたいということになれば、その仲介をする仕事する人たちです。



(新潟市歴史博物館所蔵)

この人たちは主に大川前、今の上大川前通に店を構えている人で、店の数が決まっています。それが株というもので、商売を始めたい人は、上大川前に土地と店を買って、その株を買わないと商売ができません。

廻船は、一度、この廻船問屋と取引をすると決めたら、いつでも、新潟の湊へ来たら、その廻船問屋の世話にならないといけないという規則なのです。

ですから、勝手に船頭が、俺の持ってきた塩を扱う問屋にあそこが高そうだから、あそこに売るといことはできません。必ず廻船問屋を通さなければいけないというルールになっています。

ですから、廻船問屋次第で廻船の商売が決まるということになります。その代わり、その船が1回こっきりで、あの廻船問屋はもう駄目だとなってしまうたら、新潟の港に入ってこないわけですから、やはりまた新潟に来たいと思わせてやらなければいけない。一番には、とにかく儲けさせてあげなくてはいいわけでは

あるいは、米を買うのにお金が足りないという話であれば、お金を貸しますと行って貸す。金融することによってその関係をつなぐということが非常に大事になります。もちろん、それだけの大商人ですから、金融するということが金貸しもしているわけですし、あるいは自ら船を持って船主になる場合もあります。あるいはお酒をつくっているとか、いろんなことをやっている。つまり、この廻船問屋というのが新潟の大商人ということになります。小廻の相手をするのも、「小問屋」という決まった宿があります。

そのほか、廻船問屋が荷物を、商品を卸す、あるいは商品を手に入れるときに相手になる新潟の「卸問屋」という人たちがいるわけです。これも商売ごとに、この商品を扱うのはこの問屋と決まっています。商品を、各小売のところへ卸す、あるいはほかの在郷町へ運ぶ、売ってあげるのがこの卸問屋の仕事になります。この卸の仕事をめぐっては、「表店（おもてだな）」と呼ばれる本町通と、後発の「他門店」と呼ばれる上大川前の商人と、江戸時代の前期から中期にかけて、何度も争いをしています。

もともと、表店しか扱えない商人を他門店の商人たちが扱うというので、争いが起こっています。争いをするたびに取り決めを結んで、この商品はお宅が扱う、この商品はうちが扱うというのを取り決めます。例えば、表店がメインの商品は呉服です。他門店は上大川前通で信濃川に面しているため、どちらかという重い物を扱います。塩や石、荒物の類いとか、材木とかそういったものは、上大川前の他門店の商人が扱うようになっていきます。

在宿というのは、近隣の農民から米穀を集める仕事をする人たちです。そういうさまざまな商人がいて、初めて廻船に品物を供給できる。あるいは廻船から買った品物を各地に売ることができるのです。

< 6 新潟湊を支える — もてなす人々 >

次に、もてなすことが出てきます。さっき言ったように、廻船の船頭に新潟へ来たら、また新潟へ来たいと思ってもらうことが、一番新潟の港にとっては大事。もう新潟へなんか行かないと思われた瞬間に新潟に入る品物が減っていくわけです。もちろん商売が一番ですけども、商売だけではなくて廻船問屋の世話になっている間も大事です。大きな船でなくても、品物を積んで入ってきて、それを売り払って代わりの品物を買って出港するまで2週間や1か月かかるのです。その間、船頭は廻船問屋の世話になっている。そのとき、その廻船問屋は船頭をもてなすわけです。

料亭へ行っておいしいものを食べる。あるいは素晴らしい芸を見せる。あるいは遊女がいて、遊女と楽しいひとときを過ごす。そこに資料で、今の京都府でしょうか。日本海側の船頭が自分の船頭日記みたいなものを書いていて、それを見ると新潟へ行きたいと、新潟へ入ろうと思って船を出したけど、嵐に遭って、信濃川河口、新潟の港の口を見逃して気づいたら粟島に行ってしまった。しょうがないので酒田へ入った。



（「にいがた後の月見」から）

酒田で何を考えているかということ、新潟のことを思い、新潟へ行きたかったなと「恋しさや 夏の夜ニさへいく度か ゆめおどろかす姫の思ひに」。酒田にいて新潟の女いいよなって思っている。ようやく帰りに酒田から新潟に入る。そこで詠んでいるのが「これや此 親おも子をもわすらるる新潟女郎のこへとすがたと」。これが、新潟の評判です。つまり船頭たちが新潟へ来たいなということです。この間行ったとき、いい女だったな、楽しかったな、そう思わせる。そういうことをもてなす仕事をしている人たちがたくさんいたということになります。

町名	現在の町名	娼家 軒	娼婦 人
古町二ノ町	古町通 5	21	62
古町三ノ町	古町通 6	13	32
古町五ノ町	古町通 8	27	40
古町六ノ町	古町通 9	25	50
古鍛冶町	古町通10	9	18
橋下付近	古町通12	22	25
寺町二ノ町	西堀前通5	2	4
寺町五ノ町	西堀前通8	10	31
寺町六ノ町	西堀前通9	17	41
古鍛冶寺町	西堀前通10	3	4
下町	横七番町付近	5	157
しま	毘沙門町付近	22	145
合計		176	609

文政2（1819）年ころの町別娼家と娼婦数

町名は「新潟細見」記載の表記 現行町名はおよその位置
藤村誠「新潟における花街の変遷」から転載 一部改変
（『新潟市史』から転載）

江戸の後期になってきて、その表にあるように新潟で、遊女を抱えている家というのが176軒、遊女の総数というのが609人。この当時、新潟の町は人口2万5千人ぐらいです。遊女屋もそこにあるように、古町にずっとありますし、寺町というのは西堀ですが、そこにもあるし、下にもある。実は、江戸の吉原のように限られたところで囲いがあって、そこの中に閉じ込められていたわけはありません。新潟の街中の各地にいます。古町二ノ町、五ノ町は商家が21軒だけではなくて、普通の商売している人たちがほかにちゃんといて、みんな一緒に暮らしているわけです。そういう人たちがいる。だから、この人たちは呼ばれば、旅籠屋へも行きますし、料亭へも行きます。あるいはその絵にある熊谷小路の図は、後家と呼ばれた人たちが、商家というよりも自宅で相手をしている人たちです。そういう人たちが新潟の町にたくさんて、やってきた船乗りたちをなぐさめていた。

< 7. 新潟町にくらす人々を支える町と村 >

こういうさまざまな人が新潟の町に暮らしているわけですが、その人たちの暮らしをどう支えるのか。その人たちが湊町を支えるように、その人たちが仕事をできるように支えるシステムがなければいけな



（「越後土産」から）

い。そう考えると、もちろん暮らしを支える仕事というのもあるわけです。小売りをする、お米を売る、助買（すけご）という魚屋さん、そういうさまざまな商売をする、古着屋さん、お風呂屋さん、そういう人たちがいるわけです。こういう人たちが新潟町で暮らす人々を支えているわけで、その暮らしを支えるさまざまなものも、新潟の周りから供給された。

さっきのようにイタアワセで大根を運んでくる。新潟では魚は魚を扱う魚問屋があって、そこから小売りに渡されて売られますが、野菜に関しては扱う問屋がなかった。ですから、周りの村々から運ばれてきたダイコンや野菜が新津屋小路であげられて、その市場で売られていた。そういう食料を送るといこともたくさんあった。

新潟の町が町の中だけで済んでいるかというと、この仕事をするための労働力、あるいは商業を行うための労働力というのは、近隣の村々から供給してもらっている。さっきお話しした遊女も、どんなふうに行われているかというと、遊女の再生産システムがある。売春をしている遊女がそこそこ歳をとってくる。その前に、自分の一番調子がいいころに、近隣の村々から女の子を買ってくるわけです。自分が売春をしながら、その子を育てるわけです。

育てるといっても、当然芸を仕込むのです。新潟の遊女は、江戸時代、みんな芸を持っています。芸もするし、体も売る人たちです。一定の歳まで育てて、自分が引退して、買って来た子どもを養女にするのですが、その子どもに今度、売春させるのです。それがずっと繰り返されている。

そういう意味では、周りの村々からそういう女の子を連れてくる。このシステムは明治になって芸妓になっても変わらないのです。売春ではなくて芸を売るという仕事になるわけですが、そのようによそからそういう人たちを連れてくることによって成り立っている。

それと同じように職人さんたちも、新潟の町の中で弟子をつくるだけではなくて、周りの村々から入ってきた人たちを弟子にして、手に職をつけさせる。ただ、自分の家の家業とういところでは、自分の息子に継がせたりするけれども、そこで働く労働者として働く職人たちというのは、そうやってよそからやって来た人たちを育て上げて使っていくということが行われていた。あるいは商人の丁稚さんもそうです。新潟では丁稚といわなかったみたいですが、そういうもので子どものときからやって来た年季奉公で入ってそれに商売を覚えさせて、暖簾分けするなり、家を継がせるということもたくさんあった。

もう一つ、新潟の町にとって大きな課題がありました。冬の間、船が入ってこないということです。新潟の町は船が入ってきて、そこで商売が行われることで経済が成り立っているわけです。ところが冬の間は船が入ってこない。夏場であれば、その商売を成り立たせるために、今、お話ししたように、たくさんの方が必要なわけです。ところが船が入ってこなければ、端的に言えば、天渡船持ちも仕事がない。あるいは、その荷物を運ぶ労働力をしていた瀬取りをするということをしてきた人たちも仕事がない。そういう人たちは、お金が手に入らなければ、食べる食料もどんどん減っていくわけで、小売りの商売も少なくなっていく。



(新潟市歴史博物館所蔵)

冬の間、みんな、新潟の町の人たちは生活に困るわけです。それでは、冬の経済を基準にした労働力さえ確保しておけばいいのかというと、夏、船が入ってきたときにそれに対応できないわけです。2,000~3,000艘の船が入ってくる。つまり、一日10艘ほどの船が入ってくる。それだけの人がいるので、それに対応した人間が必要なのです。

そういう意味でいうと、一番需要が高いところに合わせた人間を抱え込んでいなければいけない。そうすると、冬になってその人たちの仕事

がなくなる。それをどうするかという問題が一番です。

実際に行われていたことは、つまり、表が裏を助けるということです。新潟の町の構造は、江戸時代は通りに面したところを表と言いました。店が並んでいるところは表なのです。もちろん、そこに住んで、自分のところで商売をしている人もいますし、よその人から土地を借りてそこで店を開いている家守という人が並んでいる。その裏に労働力だけを供給したり、零細な商売をしたり零細な職人をしている人たちが借家人として暮らしているわけです。

その人たちの生活をどう支えるかというとき、つまり、この苦しいときというのは、結局、表の人たち

が裏を支えるというシステムなのです。江戸なんかでも、もちろんそうです。江戸は町の構造が違いますけれども、結局、大家と店子という関係で語られます。大家と言えば親も同然、店子といえば子も同然。その関係が基本になっていて、私的な関係の中で一種の福祉が行われている。それが新潟の町になります。そういう意味では、町の人たちが共に支え合って生きているということが言えます。

ところが借家がどんどん増えていく。それぞれ経済の在り方が複雑になっていく中で、幕末になってくると支えきれない状態が起きる。例えば、天保の飢饉のときなんかは、表も非常に苦勞する。天保の飢饉はご存じですね。東日本がすごい飢饉になって、大変なことになるわけです。このとき、各村々から食べ物が出て行ったりする。飢饉が起こるとするのは凶作が起こるのです。凶作が起きたとき必ず飢饉になるかという、そうではない。つまり、いくらかのモノがあって分け合って暮らせればいい。

ところがだいたい、政治的なものがある、凶作になったから、藩が今年年貢を取るのをやめるといえば、何とか生活ができる。ところが、江戸後期になると、お殿様が、大坂の商人から借金していて、年貢米がカタになっていて、いくら米が取れなくても年貢は取って送らなければいけないという状態になっている。

そうすると、農民は食うものがなくて困っていても年貢は取って送るということが起こる。そうすると、起こるのが飢饉です。そういう飢饉になったとき、村は山へ行って草でも何でも食べれば、なんとか生きていられる。町は、米の値段が上がると、何とか米の代わりに食べるものがあるかという、なかなかないわけです。町というのは非常に厳しいことになります。幕末になってくるとそういう事態が起こってきて、それこそ、打ち壊しということが起きてくる。

その中で新潟の奉行所も対応を迫られる。そういう大変な災害のときに備えて、米を蓄える備荒蔵というものをつくったりします。これが新潟の備荒蔵です。これは明治になってからの写真で、このときには備荒蔵ではなくて新潟医学校になっています。備荒蔵の建物を使って新潟医学校にしたのです。向こうに見えるのが白山の森で、ここは医学町です。茅葺き屋根の辺りにダイヤパレス医学町があります。

ここの手前の道が医学部へ上がって行く道です。その写真です。こういう蔵がつくられて、米が蓄えられたりします。それから、さらに幕末になってくると産業仕法ということを始めます。冬に仕事がないと言っているだけでは駄目だと、奉行がみんなに手に職をつけさせろということで、一定のお金を与えて、さまざまな職人の仕事を身につけさせるということを行います。

江戸時代は基本的には私的な扶助、助け合いということが基本的になっています。明治以降になると「救恤法」という法律ができて、行政が施策として扶助するシステムができてくることになります。

実は新潟の町は、湊町として栄え繁盛するために、新潟の町の人たちも、いろんな仕事を、役割を負ってやっていた。新潟の湊が湊だけで繁栄していたわけではなくて、消費地であり生産地である周りの村々と関係を持つことによって、初めて湊としての役割を果たせていた。それが大事なことです。

< 8. 開港と新潟町 >

最後に、開港 150 年ですから、こうした港町が開港によってどのように変わっていったのかを少しお話しします。

1869 年 1 月 1 日に明治政府によって新潟の港が開港されることになります。ただし、開港以後、ほとんど新潟では外国貿易は実際のところありません。名ばかりの開港場です。ただし、貿易の面ではそうであっても、開港場となったということの意味は非常に大きい。新しい時代でどうやって湊町して繁栄を続けていくのか。新しい湊町になっていくのかというのを、新潟の町の人たちは模索することになります。

まず、町そのものが開港場になったことによって県庁所在地となります。ここの細かい話は飛ばします。新潟は開港場であるがゆえに県庁所在地になりました。お城がなくても県庁所在地になりました。

今までお話ししたように、江戸時代、新潟は商業都市としては繁栄したけれども、城下町ではありませんから、そこで政治的なこと、行政的なこと、あるいは社会的、文化的なことで、越後・佐渡の中心だったかといったら、そんなことはありません。城下町である長岡や新発田、村松、高田には武士がいて政治をしています。

また、文化面でもやはり武士がしている。もう一つ越後の特徴は地主たちの文化があります。ですから、水原というのは、非常に文化程度の高いところです。あるいは魚沼の織物地帯の商人たち。鈴木牧之という名前をご存じだと思いますが、鈴木牧之1人が魚沼にいたわけではありません。鈴木牧之と同じような人たちが、魚沼には山のようにいたのです。それだけの文化程度を持っていた。

それに比べると、新潟は少し劣る感じです。そういうところが、この県庁所在地になったことによって、新潟の町の役割が大きく変わり政治でも中心になります。あるいは行政でも中心になる。ですから、新潟で県会が開かれるといえば、今まで来たこともない新潟県内各地の豪農たちが、村役人たちが新潟に



(『明治天皇聖蹟誌』から転載)

集まって会議をする。

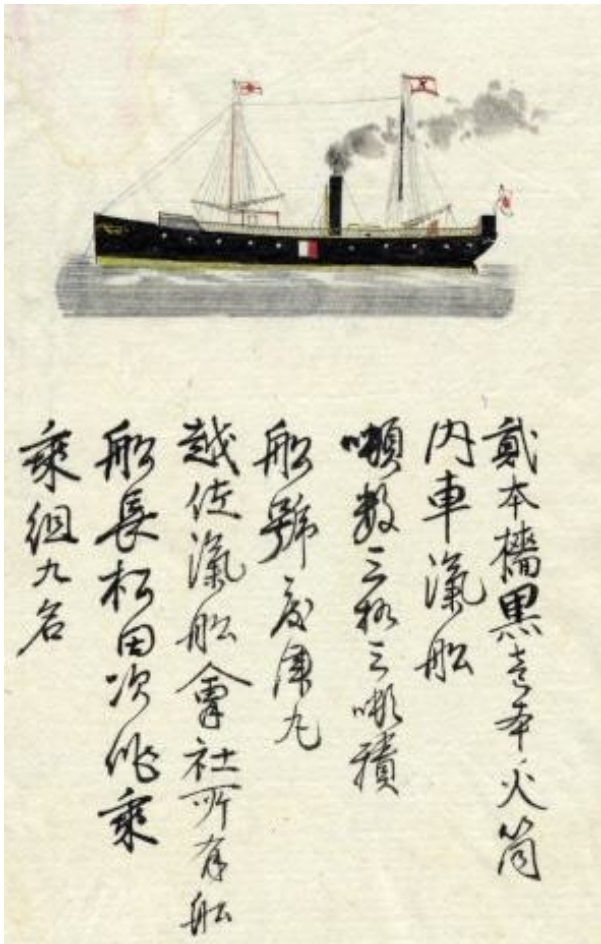
県庁の役人だって、奉行所のころはそんなにたくさんいなかった。あるいは文化面でみても、例えば教育でいえば、病院の話をしました。新潟県、越後・佐渡で最初に近代的な病院がつけられ、医学校や師範学校がつけられ、中等教育校がつけられた。

新聞も、新潟新聞が一番最初につけられる。つまり、新しい文化の出発地、発信地が新潟になっている。そういう意味ではそれまでとは違った町になっている。さらに外国人が見て恥ずかしくない町にしようということで開化のまちを目指す。例えば、275本の街灯がつけられる。石油ランプが街中

にある。あるいは、日本で最初の公園がつけられる。

そういったことで、新潟の在り方は開港場になったが故に大きく変わっていくことになります。港の関係で見ると、新潟の港は外国船がやってきて貿易が行われることはないけれども、物流の中心で中核拠点であるということは変わらないので、そこに新しい運輸装置として国内路線の蒸気船がやってきます。そうすると、三菱とか、共同運輸とか、その後日本郵船になります。そういうところが大型の蒸気船を持っている。その大型の蒸気船を使って東京へ(行く)。江戸時代であれば、廻船を使って大坂あるいは北海道とのつながりが強かったわけですが、この蒸気船によって東京市場とのつながりが強くなります。

今度は船頭が主導しているわけではなくて、新潟の商人が新潟の米を扱って東京市場の情報をもとに、東京へ積み出す。そして東京で売却するということが行われて、商人主導による輸送が行われるようになる。



(新潟市所蔵明治19年「西洋形船舶留記」から)

そして、これらの品を扱うための近距離の定期航路もできてくる。この絵に載せたのは度津丸（わたつまる）というものです。夷、佐渡と新潟を結ぶ越佐汽船というところが就航させた蒸気船です。こういう蒸気船が新潟と夷の間を定期的に動くようになる。航路の在り方がかなり変わっていくことになります。

そして新潟の町の人たちが開港場だという自己認識を持つ。それにふさわしい町、ふさわしい港にしたいという気持ちを持つわけです。それが近代港湾、埠頭を持った新しい港湾が欲しいという気持ちです。

さらに、開港場として貿易を盛んにするためにどうしたらいいかを考える。そのとき、対岸のウラジオストクだとか、対岸航路を何とか実現したい。最終的に敦賀に負けるわけですが、それをずっと目標として持ち続けるということになります。ただ、湊ということだけで考えると、新潟はこの後、工業化が進んできたり、商業も会社ができてきたりする中で、湊の性格、産業が変化する中で、港湾の位置は相対的に下がっていくことになります。

<おわりに 一 湊町としての歴史が支える近代新潟>

ただ、このように町が変わってきても、新潟という町を、ある意味では江戸時代の湊町としての在り方、その歴史が支えていたということも言えると思います。一つは新潟の町の新陳代謝の激しさです。新潟の町というのは、江戸時代は非常にのんびりできる町で、地理的な優位さから、リスクを負わなくても商売ができる町だった。それで企業心がなくなる。それを象徴する言葉が「新潟では杉と男の子は育たない」ということになります。だから自分の家を相続させようと思ったら、与板や三条、長岡から婿をもらえという話になるわけです。

実際のところ、町全体を客観的に見るとどうか。さっき言ったようによそから人材が入ってくる。その人たちが新潟をリードする経済人になっていく。そのことによって新しい時代に対応していくということが行われている。

町自体の在り方も、新潟というこの町にこだわらずに、町の範囲を拡大して、その外側にさまざまな施設をつくることによって、新しい時代に対応していく。それが都市計画だったり、都市施設の移転だったりしたわけです。その意味では、中心市街地の在り方は、時代によって変わってきているということも言えます。

そして、その町を支えてきているものは、もちろん、明治になってシステムや法律が変わったわけですが、江戸時代に形づくられてきた表と裏の関係で人々が支え合う気持ちを湊町として基本的に貫いているのではないかと思います。それが新潟の変転、発展を支えてきたのではないかと。そういう意味で、湊町というものがこの開港150年の歴史を支えてきたと言えるのではないかと思います。

今日はどうもありがとうございました。

閉会あいさつ

水辺とみなと部会座長 外内 光春 氏



皆さん、大変お疲れさまでした。

長時間にわたってのご清聴、誠にありがとうございました。「湊新潟の歴史と文化について」ということで、ご講演いただいたわけですが、いかがだったでしょうか。

先生の北前船や年貢米等物流について、それから遊女のくだりも詳しくお話がありました。職人の変遷の問題、開港してからのいろいろな船の在り方というものをお話しされており、大変参考になりました。あらためて認識を深くしたところですよ。伊東先生、本当にありがとうございました。

少々お時間をいただきます。私はこの講演を聞きながら、ある、昔からのことわざを思い出しました。「故きを温ねて新しきを知る」という、四字熟語でいうと「温故知新」という言葉で論語の一節であります。この言葉と今回の講演がリンクするのではないかと。つまり、新潟のこの歴史をしっかりと研究し、学んで、そして新しい考え方や知識を再発見し、これから、どのようにしていくかということ、われわれ住民一同が考えていかなければいけないと思っている次第です。

それには、やはりこのまちのトップリーダーである市長さんをはじめ、行政の皆さんと、われわれ地域に住む住民が一体となって、新しい新潟のまちづくりを構築していかなければならないと思っていますところでもあります。

よく皆さんもお耳にするとお思います、安全安心、すなわち安全で安心して住めるまちづくりという言葉がよく出てきます。これを単に言葉だけで終わらせないで真実のものにする。本当に安全で安心なまちをつくるということの大切さをしみじみと感じているところですよ。

と申しますのは、ご承知の人もあると思いますが、全国の都市別住みよいまちのランキングでは、残念ながらこの新潟は 50 位まで入っておりません。残念です。

それから、これに関連するのですが、都道府県別の幸福度ランキングでも上位に顔を出していません。そういう意味では、ほかの都市と比べて劣っていると思います。幸福度ランキングでは、この北信越の管内である福井、石川、富山、長野の 4 県が入っております。それと東京都でベスト 5 であります。

ですから、新潟はずっと遅れているということになります。従って、ここは住民のパワーでこの新潟をもっと発展、繁栄させていかなければいけないのではないかと思います。

来年の 1 月 1 日は開港 150 周年ということですので、これを 1 つの契機として、われわれ市民パワー、住民パワーを出して素晴らしいまちにしていこうではありませんか。

最後に、皆さん方に今日お配りした資料の中に「150 周年に向けて 湊町新潟」という冊子がございます。これはかなりの内容が記載されております。どうぞご自宅にお持ち帰りになり、もう一度、目を通してください。今日のこの講演とうまくリンクすれば、なお一層理解を深めることができると思います。どうぞ参考にして下さい。

今日は足元の大変悪く、これだけ多くの方々からご参集いただきまして、誠にありがとうございました。心から、厚く御礼申し上げまして、閉会の辞とさせていただきます。ありがとうございました。

アンケート結果

当日参加者	360	名	回答率
アンケート回答者	251	名	

【質問 1】 この講演会を何で知りましたか？（該当するすべてに○）

① ちらし	68 名	27.1%
② 自治協議会から聞いて	29 名	11.6%
③ コミュニティ協議会から聞いて	58 名	23.1%
④ 自治協委員から聞いて	37 名	14.7%
⑤ 市のホームページを見て	24 名	9.6%
⑥ 新聞等の記事を見て	46 名	18.3%
⑦ 友人・知人から聞いて	34 名	13.5%
⑧ その他	16 名	6.4%

【質問 2】 本日参加された感想をお聞かせください。

① 大変よかった	151 名	60.2%
② よかった	94 名	37.5%
③ どちらともいえない	4 名	1.6%
④ あまり参考にならなかった	1 名	0.4%
⑤ 参考にならなかった	1 名	0.4%

【質問 3】 上記【質問 2】の理由をお書きください。

別シート（1）

【質問 4】 新潟市歴史博物館（みなとぴあ）へ行ったことがありますか。

① ある	231 名	92.0%
② ない（興味がない）	4 名	1.6%
③ ない（行ってみたい）	16 名	6.4%

【質問 5】 「みなとぴあ」で企画展示してほしいことをお聞かせください。

別シート（2）

【質問 6】 最後にあなたのことをお聞かせください。

性別 男性	151 名	60.2%
女性	100 名	39.8%

年代 30～40代	14 名	5.6%
50～60代	107 名	42.6%
70代以上	130 名	51.8%

お住まい 中央区内	170 名	67.7%
中央区以外の新潟市内	75 名	29.9%
新潟市外	6 名	2.4%

別シート（1）【質問3】

本日参加された感想は？（自由意見）

講師の話し方

はっきり、ゆっくりと、高度な内容をわかりやすい話し方でよく理解できた
明瞭で、順序立てがされておりわかりやすかった

話の内容

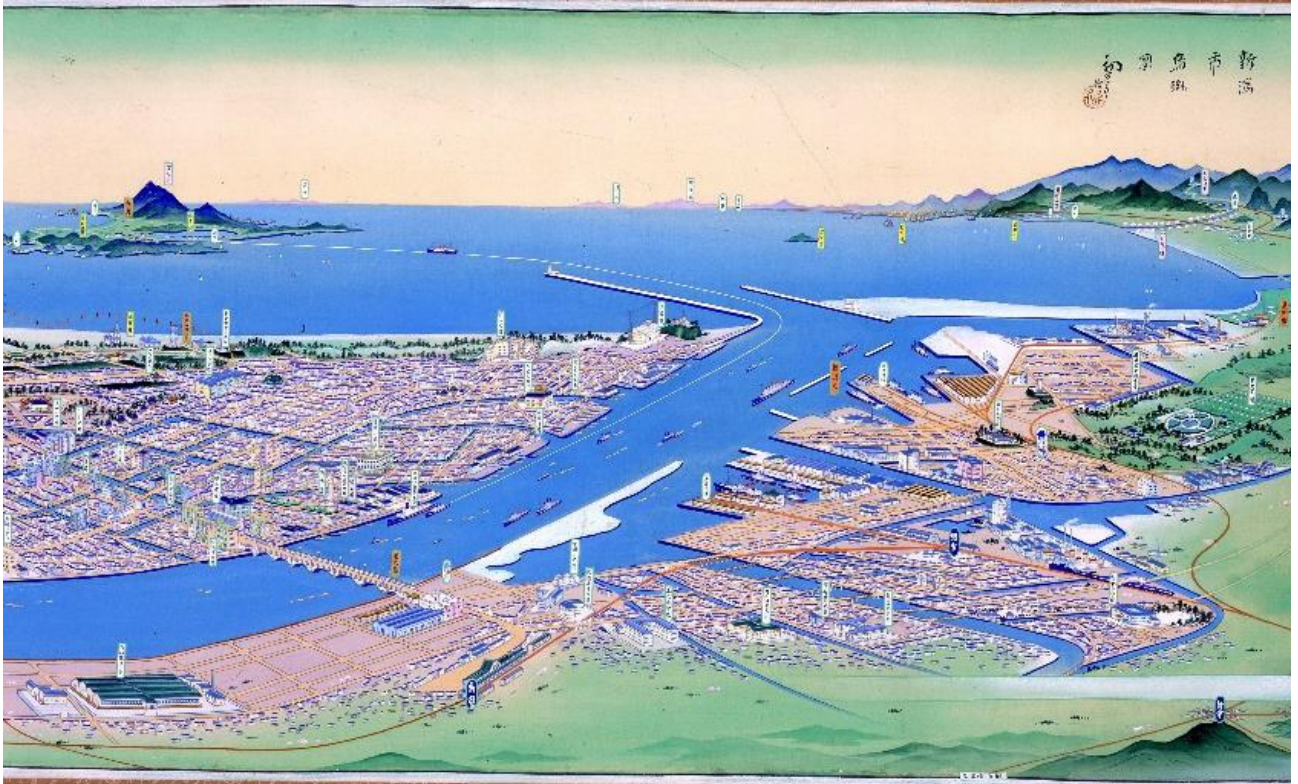
湊町新潟には全国に誇れる資源があることを知った
杉と男の子が育たない理由まで知れて楽しかった
生まれ育った新潟町の歴史は面白い
断片的な知識だった新潟の歴史の全体像の概略が繋がった
城下町でないがよく頑張ったと思う
地産地消の新潟の長い独特の歴史はこの上ない貴重な財産であることを再認識した
成り立ちを知ることで、現在の新潟をより理解できると感じた
「支え合って暮らしてきた」歴史を引き継いでいきたい
他の開港された港と違っていると感じていたが、よく理解できた
自分の住む住吉町の知ることはよいことだと思った
講演の内容に湊町新潟の繁栄を復活させるためのヒントがたくさんあった
もっと新潟湊のことを知りたい。

別シート（2）【質問5】

「みなとぴあ」で企画展示して欲しいことは？（自由意見）

展示希望

新潟港や古信濃川・信濃川の昔からの場所や生活の変化など
「湊町（港町）」をテーマに新潟と他所との比較ができる展示
戦争をはさんでの前後の街並み（特に下町）
開港 150 周年記念「港風景と船の歴史」について。写真や模型、絵図や絵馬などからも学ぶ



「新潟市鳥瞰図（部分）」昭和 12（1937）年頃 吉田初三郎画 新潟市歴史博物館所蔵

【水辺とみなと部会】

外内光春（座長） 樋口悦雄（副座長）

田村幸夫 青木孝也 三國和俊

関谷美紀枝 吉岡昭彦 松田明美

【事務局】

新潟市中央区役所地域課